

# 「タイ環境学習キャンプ」特集～はじまってから20年③

今回は私たちの原点である、バードウォッチング（探鳥）について事の始まりを紹介する。私は、20代後半から野鳥に興味を持ち始め、出歩くときの道具に双眼鏡が新たに加わった。このころ「日本野鳥の会」や「鳥類保護連盟」に顔を出したり、五日市町（現 東京都あきるの市）に職場があったので、郷土館の仲間や野鳥に詳しい地域の方々からいろいろ教わった。20年前からタイに行き始めて、亜熱帯、熱帯の野鳥に出合った。ここでの師匠が、この連載の若林卓司さんなのである。（かつてな編集人 中込 卓男）



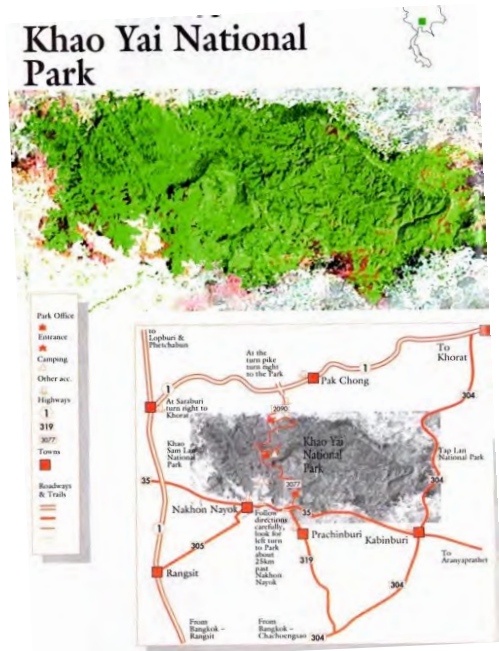
← 夜のパンダキャンプ(ウタイタニー・バンライ)シリポンさん(左)とギターを弾く若林さん(右)。二人は古くからの友人である。私たちの大切な友人であり、ともに環境学習を展開している。1年に一度だけだが、ワークショップをここパンダキャンプで一緒に実施する。ちょうどライブのセッションのように。

## タイの鳥 I カオヤイ国立公園で

若林 卓司

私は以前、プラナコーン教育大学で、日本語を教えていたことがあり、その時、環境教育の先生、学生と親しくなった。そして何度も教育キャンプに連れて行ってもらった。そんなわけで、東京学芸大学を中心とした環境教育のグループの人たちが、先生方と交流を深め、T、Jクラブを結成したとき、私にも声がかかってきた。

日本側はほぼ毎年三月の終わりごろタイにやってきて、タイ側が用意したプログラムに沿ってタイの環境問題を直に見聞する機会を持ってきた。私の役目は通訳で、先生方の用意したプログラムはなかなかおもしろく、探鳥の時間もあるので渡りに船だった。また、久しぶりに日本の人たちといろいろ話し合えるのも楽しかった。



※1

去年、1999年は北部、ドーイ・ステープ、ドーイ・インタノンへ行った。今年はサイチョウの生活環境を知るためにカオヤイ国立公園へ行った。とても幸運だったのは、サイチョウ研究の第一人

者ピライ先生の説明を受けたことだ。着いた日の夜、スライドによる説明があった。その100枚以上のスライドは見ごたえがあった。生活環境からサイチョウの生活とその保護、アフリカのサイチョウにまでわたっていた。ただ、先生の言葉を翻訳しなければならない私は、いつ終わるだろうかと、そんなことばかり考えていた。

次の日の朝はグループを三つに分けて、それぞれ子育て中のサイチョウを観察に行く。サイチョウはナイーブな鳥なので、巣の近くまで行ってブラインドで覗く二つのグループは人数制限。ピライ先生が引率するその他大勢のグループはハウスワット滝の方へ行く。道路から森の中へ少し入ったところが見晴台になっている。そこから谷を隔てた向こうの尾根に何本も大きなヤーンの木が立っていて、そのうちの一本に大サイチョウの巣があるという。二、三百メートルぐらい離れているので、肉眼でははっきり見えない。私たちは幸運だったのだろうか、午前中いっぱいかけて、オスが給餌に戻ってくるのを二回見る事ができた。望遠鏡の視野には細い隙間を残して閉じた洞の前にしかりと摑まって、吐き戻してフタバガキの実を入れている姿がはっきり見えた。また何羽かのオオサイチョウ、キタカササギサイチョウの飛翔も見ることができた。ピライ先生に尋ねてみると、繁殖に参加しない若い個体だそうだ。



▲オオサイチョウ

▼キタカササギサイチョウ



昼からは、サイチョウの生活環境としての森をピライ先生に案内してもらった。巣になる洞ができる木、餌になる果実のできる木、そういった木の生存のための戦略。クマやキツツキの役割。サイチョウを中心に据えると、今まで見えなかったものが見えてくる。この森のトレールではトラの足跡を見た。先生の片腕、ブンマーさんの話では昨夜の足跡だろうということだった。また、辺りでトラが縄張りのためになすりつけた強烈な尿の臭いもかいだ。このトレールではダニが多かったが、別のトレールを歩いた人は山ビルにやられたとっている人が多かった。

ピライ先生のサイチョウ研究はもう20年になるという。ないものだらけの出発だったそうだ。しかし、先生の努力によってもたらされたものは大きくて、貴重なものだと思う。



▲ブタオザル※2



三日目はバンコクに戻ることにしていた。でも、早朝、時間があつたので、中込さん（なかごめ）、モンさん、それにタオと一緒にバンガローの周りを探鳥してみた。プタオザルが一匹木にいたが、ちょっと様子がおかしいので近づいてみると、ヘキサ（Green Magpie）がさかんにサルの回りを飛び回って攻撃している。



▲ヘキサ

この鳥はドバトより少し大きいくらいの、くちばしは赤く、体は緑色のきれいな鳥だが、性格はなかなか荒っぽい。バンコクの北、バンサーイに鳥の大きいケージがあり、中に、いろいろな鳥が放し飼いにしている。なかなか見られない鳥が近くで見られるので、何回か行ったが、あるときこの鳥はケージの中で子育てをしていたらしく、知らずに近くを歩いて頭をしたたかつかれたことがあった。けっこう痛かった記憶がある。サルは巣の中の卵かヒナを狙っているらしく、つつかれても、つつかれてもなかなか移動しない。しかし、その攻撃があまり執拗なのでサルもついに重い腰を上げたが、そのままでは収まらないようだった。近くにタイ人が「モット・デー」と呼んでいる赤いアリの巣を見つけた。木の葉を楕円形に巻きつけて作った巣だが、サルはその巣を壊して卵を食べ始めた。イーサンでは中の卵は乙な食べ物になって

いる。しかし、このアリも荒っぽいことではヘキサに負けない。体についたアリの払い落とすのにたいへんそうだった。かなり手痛くかまれているのは明らかだった。双眼鏡で情けなそうなサルの顔を見ていると、こうはなりたくないと思った。

モンさんもタオも鳥を見つけるのがとてもはやい。そして、すぐに望遠鏡のピントを合わせてくれる。中込さんも私も後をついて行くだけだ。細い道を歩いて車道に出た。車道の片側の繁みにアオバネコノハドリのメスがいた。この鳥はオスよりもきれいだと思う。緑色の葉の中で、同じような色をしていながら、所々にある水色がなんともいえないような地味な鮮やかさを作り出している。



▲アオバネコノハドリ

タオが言う。「向こうのフタバガキの木にワシがいる。さかんに鳴いていた鳥が急に静かになったので見てみたらいた。」カンムリワシだった。



▲カンムリワシ

少ししてから、望遠鏡を覗きながら、今度はモンさんが言う。「あれは普通の犬じゃない。二匹今車道を横切った。」

結局、間をおいて、全部で六匹通過した。しかし、ずいぶん遠くを横切ったので、望遠鏡ではっきり姿を捉えても、どのくらいの大きさか実感するのが難しかった。尾は太めで黒っぽく、耳の内側の毛も黒っぽかった。野生のイヌで、タイ語では「マーナイ」という。鳥もたくさんいたし、この野生のイヌも気になったが、そろそろ戻らねばならない時間になった。帰りの道では二種のテナガザルがさかんになき交わしをしていた。



▼シロテナガザル※2



▲野生のイヌ※2

出典

※1 Gray, Piprell & Graham (1994)

National Parks of Thailand

※2 John W.K. Parr (2003) A Guide to the  
LARGE MAMMALS OF THAILAND

※3 1, 2 以外のもの

Boonsong Lekagul, Philip D. Round (1991)

A guide to the Birds of Thailand

## 『植物と人々の博物館』 vol. 18

### 雑穀栽培講習会報告

5月14日(土)に、第19回雑穀栽培講習会を開催しました。今回は、東京学芸大学学生実習(自然文化調査法A&B)のフィールド実習としても開催しました。



講師は、畑と雑穀料理：丹波山村の岡部良雄さんご夫妻、上野原市西原地区の中川智さん。雑穀の専門のお話：木俣美樹男先生、小菅村のお話：守屋アキ子さん、青柳諭さんです。

雑穀料理では、ヒエ粥とモロコシ(甲州系=ムカシモロコシ)といんげんごはん、しゃくし菜の漬物をご指導いただきながら作り、食しました。雑穀の播種は、キビとアワでした。



雑穀料理



5月21日のちえのわ農学校は、田植えとドラム缶風呂もありました。